

サポート教室について

不登校児童・生徒の状況

対象となる生徒は、大きく次の2つの傾向が見られた。

- 小学生の時から学習に遅れや課題があり、それを取り戻せず中学校の授業についていけないことから不登校になってしまうケース。
- 体調不良等による欠席がきっかけで、教室に戻れなくなってしまうケース。

具体的な取組

学習の遅れで不登校傾向になった生徒に対し、保護者が付き添いやすい時間帯や顔見知りの支援員がいる日、本人の苦手な教科のない曜日等を考慮してスタートした。登校でき、そのまま教室へ行けることもあった。その後も、苦手教科の時間は別室で支援することで登校意欲の低下を防ぐようにした。

不登校の期間があり、学校生活に安定して適応できない状況の生徒に対し、市の教育支援センターと連携して対応した。学校に足が向きにくいときには教育支援センターを活用し、登校できるときには苦手教科の時間を別室で支援を受けられるよう体制を整えた。長期や連続の欠席を減らすことができた。

一時的に学校生活への意欲を失った生徒に対し、担任と面談できる時間と別室支援の時間をうまく連携させたところ、登校につながった。その後、遅れを感じている教科の学習機会として意欲的に別室を利用するようになった。



体調を崩しやすく、教室で1日過ごすことへの不安から欠席がちになった生徒に対し、週1回1時間の短時間から別室登校を提案した。午後の時間帯を設定し、体調によっては直前の欠席も可能であることを伝え、安心感をもってもらえるようにした。

成果

- 別室登校により、登校への不安が徐々に軽減して教室復帰への自信がもてるようになった。
- 個別の対応によりプライバシーが守られ、保護者や生徒の安心感につながった。

課題

- 支援員と学校、支援員同士の情報共有や引継ぎのための時間確保や方法。
- プライバシーに配慮した教室の確保等の環境整備。

サポート教室について

不登校児童・生徒の状況

本校では毎年不登校の生徒が各学年数名おり、こうした不登校生徒の居場所や学習の継続などの課題解決のために、サポート教室を毎日開室している。サポート教室には毎日1から2名の支援員を配置し、生徒一人一人の状況や学習ニーズに合わせた指導及び支援を行っている。

具体的な取組

<不登校生徒の居場所としての役割>

集団での生活が苦手な在籍学級に入れない生徒が安心して過ごせる場所として、サポート教室を開室している。生徒のペースに合わせた登校を行えることで、生活習慣を整えたり、学習意欲を継続したりすることができている。

<基礎学習の定着の場としての役割>

小学校時代の不登校などが原因により中学校の学習についていけずに不登校になりそうな生徒が、サポート教室で小学校の学習内容の振り返りや中学校の学習内容の定着を目指して学習を行うことで、学習に対する自信をつけ、不登校になることを防ぐことができている。

<安心できる教室整備>

全ての机をパーテーションで区切ったり、校舎内を通らずに入室する経路を確保したりするなどの環境を整備することで、生徒一人一人のペースや心の安心感を大切に過ごせるようにしている。

<サポート教室支援員との連携>

生徒の欠席が続いているなどの変化があったときには、担任とサポート教室支援員などが連携し、当該生徒との面談及び支援の方向性の確認などを行っている。

成果

教室以外にも学校に居場所があることにより、学級に入れなくても安心して登校できる生徒が多くいる。サポート教室への通室を継続したことで、学級復帰への足がかりになった生徒もいる。

課題

担当する支援員によって支援・指導方法に違いが出ないよう、情報共有の徹底が必要である。

2つの別室指導を中心とした不登校支援について

不登校児童・生徒の状況

当該生徒は、中学2年生であり、小学生の時から不登校状態が継続している。不登校の要因は、人とのコミュニケーションの取り方に難があり、教室のような大人数の空間が苦手なためである。現在、教室には入れていないが、毎週のSCとの面談、サポート教室での個別学習にほぼ休まず参加、居場所としての別室への通室も始めた。

具体的な取組

○別室対応による不登校生徒の支援

- ・生徒昇降口とは異なる入口から、すぐに入れる教室を「支援室」として利用。
- ・ユニバーサルデザインに基づく、静かで落ち着きのある教室環境の整備。
- ・ICTを使って、入退室の時間やその日の学習内容を担任に報告。
- ・支援員の見守り。



○サポート教室での個別学習支援

週に2回、「サポート教室」と呼ぶ小さな部屋で、1時間程度の学習支援を受けている。支援員は教員免許を所有しており、生徒の学習意欲の持続を第一に考え、スモールステップでの支援を行っている。



○支援会議の企画、運営等

- ・毎週の特別支援委員会での事例検討。
- ・SSW及び子ども家庭支援センター、SCを入れての拡大支援会議を各学期のはじめに実施。

○教育支援センター等との連携

- ・特別支援委員会、拡大支援会議に出席するSSWを通じて、市教育相談室との連携を図った支援を進める。
- ・市の教育支援センターの体験入室を不登校生徒に紹介したり、逆に教育支援センターから支援室への登校ができそうな生徒の情報を集めたりする。

成果

9月末現在の不登校出現率（新規）は1.54%であり、都平均以下の達成指標3.71パーセント以下を満たしている。今年度は、学校からの働きかけにより、教育支援センターや当該生徒のように支援室に通室できるようになった生徒が6名いる。

課題

何も支援を受けておらず、状況が変わらない6名の生徒への支援方法を組織的に検討する必要がある。

不登校生徒に対する支援について

不登校児童・生徒の状況

小学校 6 年次後半から集団適応が困難になり不登校になる。中学校 1 年次は保健室登校（週 1 時間）・特別支援教室（週 2 時間＋給食）・放課後サポート教室（週 1 時間）による支援をした。学級での活動に参加が難しい状況になり特別支援教室を退室した。

具体的な取組

○切れ目のない支援

- ・担任から保護者への電話連絡
- ・担任と当該生徒との面談（週 1 回）
- ・特別支援教室退室後も在室時に支援していた巡回指導員から校内別室指導支援員が引継ぎ連携して継続支援

○関係機関等との連携

不登校生徒やその保護者の心理的な不安に寄り添うため SC や SSW などと情報を共有するとともに、面談や家庭訪問などを積極的に実施した。

○学習支援

当該生徒の学習の遅れへの不安を軽減するため放課後、学習支援を行った。校内別室指導支援員が 1 対 1 で当該生徒の学習進度に合わせた指導を実施した。

○校内委員会での情報共有

当該生徒ごとに、多岐にわたる支援をいつ、どこで、だれが実施したのかを記録し、学校全体で共有できるようにした。その記録をもとに週に一回、情報共有の場を設け、具体的な支援方法の検討を行っている。

○環境整備

- ・他の生徒の視線を気にせず、いつでも登校できるように昇降口を經由しない入口を別に用意。
- ・サポート教室も通常学級とは階をわけ、安心して過ごせるよう配慮。



成果

継続的な支援を続け、中学 1 年次は保護者との連携もとれたことが対象生徒の学校に対する安心感につながり別室登校ではあるが 6 割登校できた。2 年次は、学習への意欲も出てきており進学も前向きに考えるようになっている。

課題

不登校に関する校内の基本方針や未然防止マニュアルを整備し、全職員の共通理解を図っていくことが課題である。

不登校生徒が校内で過ごす「サポートルーム」の活用

不登校児童・生徒の状況

小学校から不登校が、継続している生徒も多く、また、入学後に集団生活に適応できずに不登校状態になる生徒も多い。生徒本人の学力面や行動面の発達、健康面（起立性調節障害等）、家庭環境に起因するもの、その複合のものなど、理由はさまざまである。本校で設置している「サポートルーム」を利用している生徒も多い。

具体的な取組

「サポートルームの入室」

担任が窓口になりサポートルームを紹介。専任教員による保護者・生徒面談を行い、一人一人の状況や希望に応じた利用を提案する。朝から自学自習する生徒や、放課後に短時間登校する生徒などさまざまである。



「別室生徒担当教員の分担表の活用」

各学年において授業のない教員による分担表を作成し、その時間帯に別室で過ごす生徒へ声をかけ、学習面を含めた支援を行っている。担任以外にも教科担当や学年の教員が生徒の様子を知ることによって生徒理解が深まっている。

「情報共有」

毎週行う教育相談部会に SC や SSW が参加し、生徒の情報共有や対策を検討している。また、サポートルームの支援員の記録を共有しながら専任と支援員と引継ぎを行い生徒理解につなげている。学校全体で、支援が必要な生徒の情報共有、対策に努めている。

「進路学習会の開催」

市内の不登校生徒の保護者を対象にした進路学習会を開催した。通信制高等学校の先生や卒業生の保護者を招き、高校生活の内容や保護者の経験談を聞く会とした。参加した中学生の保護者からは参考になった、不安が解消されたとの声が多く、有意義な会となった。

成果

学校に登校したいが教室に入ることが難しい生徒の居場所として、本校独自の「サポートルーム」は有効である。後に教室に復帰する生徒、サポートルームと教室を時間や体調によって使い分けることで持続的に登校できる生徒も複数見られる。

課題

利用する生徒が多くなることで、生徒それぞれのニーズが異なり、個別のニーズに合わせて過ごす場所の確保が難しい。